

丁寧体世界における「上手」、「下手」の使用

横田 隆志*

The use of *jyozu*, *heta* in the polite situation

Takashi Yokota *

Received October 30, 2006

Abstract

Jyozu and *heta* are the words, which learners of the Japanese language study in the introductory class. These words are easy for the learners to use when they talk in the classroom and out of the classroom. However, sometimes these words are not suitable in some situations and not correct to some users.

This paper examines how we can use these words in the polite situation.

1. はじめに

「上手」、「下手」とも初級の早い段階での学習語彙である。^(注1) また、文型的にも、「～は～だ。」の形をとることができるので、学習者にとって、使いやすく、学習者と会話をする際に頻繁に耳にする。

しかし、「先生の授業は上手です。」「山田先生の中国語は下手です。」など、学習者が「上手」、「下手」を使用して作る文の中には、待遇表現として不適切なものも多く見られる。それは、「上手」には、「感謝」、「ほめ」、「プラス評価」などの意味を含んでおり、「下手」には、「けなし」や「マイナス評価」の意味が含まれているために、これらの語彙を使用する際には対人関係を考慮した上での使用が必要となってくる。そこで、「上手」、「下手」の使用を対人関係と使用場面をもとに日本語教育の立場から考察する。

2. 先行研究

森田 (1986) では、「上手」は思考や行動によって生み出される物の出来ばえ・技巧などのすぐれている状態を表すとしており、「下手」については、「上手」と対義関係を持つ用法があ

* 国際交流センター
International Exchange Center

るとしている。また、「上手」、「下手」は技巧面での優劣に対する判断の色あいが強く、意識的な行為に対する技巧の巧拙を考える客観的判断となりやすいと述べている。

また、「ほめ」についての研究では、蒲谷、川口、坂本（1996）が「ほめ」を行う側の表現意図により、本当にはめたくて、その気持ちを相手に伝える「実質ほめ」と表現意図がほめること自体にあるわけではなく、相手との関わり方についての態度が伝わることを目的の「形式ほめ」に分けている。そして、それらがどのような相手に使用できるか分析している。

しかし、「上手」、「下手」がどのような人間関係や場面で使用できるか、ということや「ほめ」だけではなく、「けなし」の意味も含むであろう「下手」の使用に関することには言及していない。そこで、本稿では、「上手」、「下手」を人間関係と使用場面という2つの側面から、どのような場合に使用できるのかを待遇表現をもとに検討していきたいと思う。

3. 人間関係と使用場面

人間関係については、「表現主体」<「表現の相手」という前提のもと^(注2)、①「表現主体」が「表現主体自身」のことについて「表現の相手」に対して表現をする場合、②「表現主体」が「表現の相手」のことについて「表現の相手」に対して表現をする場合、③「表現主体」が「話題の人物」について「表現の相手」に対して表現をする場合と3種類の人間関係の観点から検討する。

使用場面については、さまざまな場面が考えられる。しかし、それぞれの場面は無限である。そこで、鈴木（1997）の単に言語コードが変わるだけではなく、異なる行動規範に基づく世界、「丁寧体世界」、「普通体世界」をもとに、会話が発せられる場面を2つに分ける。そして、丁寧体世界での「上手」「下手」の使用を考えることにする。

丁寧に話さなくてはならない状況は話し手と聞き手の人間関係と会話が行われる場面にある。そこで、丁寧体世界の人間関係は、佐々木（1994）の分類を基に、A恩恵関係、B先後関係、C利害関係、D上下関係、E親疎関係が起こる関係とする。また、丁寧体世界の場面は公的な場面、改まりの場面とする。

4. 丁寧体の世界における使用

4-1. 丁寧体の世界

丁寧体の世界においては、丁寧に話すことが求められる。ただ単に、「です・ます」、尊敬語、謙譲語をきちんと使用するというだけでなく、さまざまな文化的な決まりごとをも考慮しなくてはならない。形式面での待遇表現だけではなく、相手に不快感を与えずに、人間関係を円滑に保ちながらコミュニケーションをとる。つまり、「表現者」が「表現の相手」に対して、発せられた言葉が、「表現の相手」に対して失礼ではないものでなくてはならないのである。

4-2. 「上手」の使用

4-2-1.

まず、「表現主体」が「表現主体自身」のことについて「表現の相手」に対して表現をする

場合を考える。つまり、私が私自身のことを相手に話す場合である。これは主に自己紹介や自分自身ことを話す際に用いるものである。

(1) #私はサッカーが上手です。

(2) #私は日本語が上手です。

自己紹介をさせると、このような表現をたくさん聞くことがあるだろう。しかし、丁寧体の世界では、自分自身のことに対して、「上手」というのはいいづらい表現である。これは、日本語は謙遜を美德としているため、相手の立場や地位を自分より上位とし、一段低くへりくだって振舞うからである。自信を持っているものを「上手」と自分自身では表現しないほうがいいのである。自己紹介等で話すときには、「～が好きです。」を使うといいように思われる。

また、自分自身の専門領域であり、誰にも負けない、つまり、客観的にみても技巧面において優れていても、「上手」は使いにくい。

(3) #(Jリーグの選手が) 私はサッカーが上手です。

(4) #(日本語が本当に上手な留学生) 私は日本語が上手です。

「表現の相手」が「上手ですね」と表現したことにはたいしても、謙遜を表すために相手の表現をそのまま受け入れることもよい表現ではない。(6)のBの答えは、相手のほめを肯定している、つまり、「私は～が上手です。」と自画自賛していることと等しくなり、いやみに聞こえたり、ずうずうしいという印象を与えかねたりする場合が多い。

(5) A 日本語が上手ですね。

B いや、まだまだです。

(6) A 日本語が上手ですね。

B #はい。日本に20年住んでいますから。

つまり、丁寧体の世界において、実際にある技術が優れている場合でもそうでない場合でも「表現主体」は「表現主体自身」については「上手」は使えず、また、ほめに対しても謙遜しなければならない。

4-2-2.

次に「表現主体」が「表現の相手」のことについて「表現の相手」に対して表現をする場合を考えてみる。これは、相手に何か質問をしたり、確認したりする時に使われる表現である。

(7) #(日本語の先生に) 先生、日本語を教えるのが上手ですね。

(8) #(プロ野球選手に向かって) 野球、上手ですね。

「上手」には褒める意味を含んでおり、「目上には感情を伝えることができない。」(蒲谷、

川口、坂本 1996)ということから「実質ほめ」を使用している(7),(8)の文も使用できない。また、褒めるという行為は評価につながる。評価する立場ではないのに(7),(8)の文は評価をしているが、評価する立場ではないものが評価を与えることはできない。専門家(仮に名前だけであっても)の専門的なものについて評価できる立場にない場合は、評価することができないため「上手」を使うことはできない。

しかし、「表現の相手」に対して、専門外のものを「上手」を使用して「褒める」ことは可能である。

(9) 課長, ゴルフ上手ですね。

(10) (中国人留学生が日本語の先生に) 中国語上手ですね。

ただ、これらの表現も「表現の相手」がある専門性を持つ場合には、使うことができないだろう。

(11) # (大学時代にゴルフ部だった課長に) ゴルフ上手ですね。

(12) # (中国の大学を卒業している日本語の先生に) 中国語上手ですね。

また、褒めるという行為は「皮肉」「嫌味」などを表す事ができるために、(9)や(10)の場合でも注意することが必要である。

(13) # (一緒にゴルフに行き、はるかに自分のスコアより悪い課長に対して) ゴルフ上手ですね。

(14) # (明らかに下手な中国語を使う日本語教師に対して) 中国語上手ですね。

「上手なんでしょうね。」「上手そうですね。」「上手ですか。」など「表現の相手」に対する質問、感想の際も注意する点は同じである。

4-2-3.

最後に「表現主体」が「話題の人物」について「表現の相手」に対して表現をする場合を人間関係を考えながら考察してみる。

a 「表現主体」<「表現の相手」<「話題の人物」, 「表現主体」<「話題の人物」

つまり、課長に社長のことを話す場合、先輩に部長のことを話す場合などである。

(15) 社長はゴルフが上手ですね。

(16) 社長はゴルフが上手ですよ。

(17) 社長はゴルフが上手ですか。

(15), (16), (17) とも、使用するのには問題がないように思われる。

しかし、(15), (16) は「表現の相手」のほうが明らかに技術が上の場合は使わないほうがよい。また、「話題の人物」が目の前にいる際には、(15), (16) の表現は使うことができるが、

(17) は使わないほうがよいだろう。

b 「表現主体」 < 「表現の相手」 > 「話題の人物」, 「表現主体」 < 「話題の人物」
社長に課長のことを話す場合や部長に先輩のことについて話す場合である。

(17) 課長はゴルフが上手ですね。

(18) 課長はゴルフが上手ですよ。

(19) 課長はゴルフが上手ですか。

(17), (18) は (15), (16) と同じように, 「表現の相手」のほうが明らかに技術が上の場合には使わないほうがよい。また, 「話題の人物」が目の前にいるときも, 「表現の相手」のほうが明らかに技術が上の場合には使わないほうがよい。

c 「表現主体」 < 「表現の相手」 > 「話題の人物」, 「表現主体」 > 「話題の人物」
課長に同僚について, 先生にクラスメイトについて話すときなどである。

(19) 田中君はゴルフが上手ですね。

(20) 田中君はゴルフが上手ですよ。

(21) 田中君はゴルフが上手ですか。

これらに関してはあまり問題がないように思われる。

4-3. 「下手」の使用

4-3-1.

これも「表現主体」が「表現主体自身」のことについて「表現の相手」に対して表現をする場合から見ていく。

(22) 私はサッカーが下手です。

(23) 日本語は下手です。

これらは, 実際のサッカーの技術や日本語能力とは関係なしに, 謙遜すること自体が丁寧であるためにほぼ全ての表現に使うことができる。

4-3-2.

「表現主体」が「表現の相手」のことについて「表現の相手」に使う場合だが, これはいかなる時にも使用することはできない。

#(24) 先生は中国語が下手ですね。

#(25) ゴルフが下手ですね。

ここでも実際の能力や技術とは関係なしに、「下手」という言葉に「マイナスの評価」や「けなし」の意味があるため使うことができない。表現相手の専門性や自分との比較もできない。

4-3-3.

「表現主体」が「話題の人物」について「表現の相手」に対して表現をする場合も「上手」と同じように3つの関係から見ていく。

- a 「表現主体」<「表現の相手」<「話題の人物」, 「表現主体」<「話題の人物」の場合や「表現主体」<「表現の相手」>「話題の人物」, 「表現主体」<「話題の人物」の場合はいずれも使うことができない。

#(26) (課長に対し) 社長はゴルフが下手ですね。

#(27) (他の先生に対して) 田中教授は授業が下手ですね。

#(28) (社長に対して) 課長は歌が下手なんです。

#(29) (先生に対して) 田中先輩はサッカーが下手ですね。

- b 「表現主体」<「表現の相手」>「話題の人物」, 「表現主体」>「話題の人物」の場合は使うことができる。

(30) 田中君はゴルフが下手です。

(31) 田中はゴルフが下手なんですよ。

ただ、この場合も「田中はあまりゴルフが上手ではありません。」などの表現のほうが適切である。

5. まとめ

本稿では、「上手」、「下手」を対人関係もとに丁寧体世界での使用を考察した。

以上のように、「上手」、「下手」は丁寧体世界では基本的には評価できる相手しか使うことができず、使用範囲が狭い語彙である。初級の語彙ではあるが人間関係をよく考慮しながら使用しなければならない基本語彙であるということが明らかになった。日本語指導の際に学習者の母語の意味や使い方とは違うため、注意して教える必要があるように思われる。

註

注1 「みんなの日本語」スリーエーネットワークでは「上手」9課, 「下手」9課で新出語として取り上げられている。

注2 <, >はどちらの立場が上か下かを表している。

参考文献

- 蒲谷・川口・坂本（1998）「敬語表現」大修館書店
佐々木瑞枝（1994）「外国語としての日本語」講談社現代新書
鈴木陸（1998）「日本語における丁寧体世界と普通体世界」『視点と言語行動』くろしお出版
野田・迫田・渋谷・小林（2001）「日本語学習者の文法習得」大修館書店
バルバラ・ピッツィコニー（1997）「待遇表現をから見た日本語教科書」くろしお出版
文化庁（1971）「待遇表現」大蔵省印刷局
森田良行（1991）「基礎日本語辞典」角川書店